

2010年(平成22年)3月18日 木曜日

助産師ら2割担当経験

産科スタッフの2割がドメスティックバイオレンス(DV)被害者とみられる妊婦を担当した経験があり、被害者の約4割に切迫流産など何らかの異常が見られたことが、岡山大学院保健学研究科の大学院生川原みちよさん(30)の看護学専攻Ⅱらのアンケートで明らかになった。一方、スタッフの多くが対応方法が分からず苦慮している現状も浮き彫りになった。(伊丹友香)

「DV被害」妊婦

岡山、広島703人 岡山大院生が調査

調査は昨夏、産科のある岡山、広島県内47医療機関の協力を得て助産師、看護師、医師ら計703人に実施。DV被害者と思われる妊婦について、144人(20・5%)が「自分が担当した」、151人(21・5%)

が「同僚が担当した」と答えた。調査では、DV被害が疑われる妊婦の実数は明確でないが、その妊娠経過を尋ねたところ、約4割に切迫流産、早産、胎児の発達遅延などがあった。検診時の

マニュアル作成急務

様子を問うと、約25%のスタッフが被害を受けた妊婦は胎児への愛着が「弱い」「どちらかといえば弱い」と感じていた。

支援についての質問(重複回答)では、259人(38・5%)が「相談に乗りたい」としたが、「どうすればよいか分からない」との回答も290人(43・2%)に上った。

川原さんは「DV被害の実態は分かりにくく、他人が介入しづらいため対応は難しい。産科スタッフが現場で働きながら専門知識を身に付ける機会は少なく、教育や対応マニュアル作りなど環境整備が急務」としている。

対応
慮
対
苦